

Ⅲ. 胎児異常の管理指針に関する研究

分担研究者

香川医科大学

神 保 利 春

研究協力者

北里大学

西 島 正 博

九州大学

小 柳 孝 司

北海道大学

藤 本 征一郎

名古屋市立大学

鈴 森 薫

筑波大学

是 沢 光 彦

福島県立医科大学

佐 藤 章

香川医科大学

原 量 宏

国立循環器病センター

千 葉 喜 英

東京大学

上 妻 志 郎

1) 胎児異常の分類, 異常発現予知とスクリーニング方法に関する研究

1. 調査の目的

本研究班所属の各機関は、それぞれの地域における胎児異常疾患の診断・治療のセンター的役割を果たしている。これらの各機関において、過去の3年間に経験した胎児疾患、診断時の妊娠週数、分娩時妊娠週数、胎児又は新生児治療の有無、児の予後等について調査し、胎児診断・胎児治療の現状を把握することを目的とした。

2. 研究方法

各機関に対し、上記項目についてアンケート調査を行い、調査表に記入の上回収し、分析に供した。

3. 調査結果

調査結果は別表1～2に示した。

まとめるにあたっては、対象疾患は主なものとどめた。パーセントは、3年間9機関でとりあつかった全奇形数(397例)に対する値である。診断時週数および分娩時週数は、その平均値、()内はその範囲を示す。胎児・新生児治療の内容は、主な疾患に関して、その内容および症例数を示し

た。胎(3)とは、胎児治療3例の意味である。

胎内治療を行ったものは106例、そのうち78.3%は胎児水腫に関するものであった。この内容は別表2に示した。

4. まとめ

① 過去3年間、9機関でとりあつかった胎児異常の症例は397例であった。合併する奇形も多いため、疾患の種類とのべ数は、これをはるかに上回るのは当然である。

② 胎児奇形調査を主としたため、出生前診断のうち、CVS、羊水穿刺、胎児採血等の検査によるものは、そのほとんどが洩れており、主として、超音波診断可能な疾患の分布にとどまったのは、止むを得ないと考えられる。

③ 逆に、無侵襲で行える超音波診断による異常の発見と治療という観点からすると、今後管理指針を検討していく上で、大きな手掛りを残したともいえよう。

④ 今後、更に症例を各年毎に積み重ねるとともに、調査表をもとに、個々の疾患別管理指針を検討する予定である。

別表1. 胎児異常の発生調査（3年間，9機関）

疾患名	症例数	%	診断時週数	分娩時週数	胎児，新生児治療等
性染色体異常	3	0.8	17	20	
トリソミー	24	6.0	31(20-産後)	32(22-40)	
無脳児	30	7.6	23(12-35)	25(14-37)	
小頭症	1	0.3	32	40	
全前嚢胞症	12	3.0	29(23-33)	33(26-38)	胎(2)脳室穿刺
Arnold Chiari syndrome	2	0.5	32(32-産後)	38	
単眼症	4	1.0	28(23-30)	31(26-34)	
口唇裂，口蓋裂 etc.	18	4.5	31	37	
嚢胞性リンパ管腫	14	3.5	23(16-35)	27(16-40)	胎3穿刺，新2ope，2穿刺
ASD	8	2.0	33	36	
VSD	20	5.0	32	36	
ECD	4	1.0	34	36	
大動脈縮窄症	7	1.8	28	33	
心内膜線維性症(EFE)	5	1.3	28	32	
Epstein 奇形	2	0.5	29	39	
左心低形成症候群(HLHS)	4	1.0	24	32	
PA	5	1.3	30	37	
PS	7	1.8	30	35	
PDA	15	3.8	31	34	
TA	2	0.5	33	38	
TR	7	1.8	31	37	
TGA	5	1.3	28	34	
TOF	3	0.8	29	36	
共通房室弁口	6	1.5	30	32	
大動脈弓	2	0.5	35	35	
心肥大	2	0.5	30	39	
胎児不整脈	7	1.8	31	38	胎(1)強心剤

刺激伝導系異常	1 1	2.8	2 7	3 5	
単心室, 単心房 etc.	4	1.0	2 4(16-28)	2 9(19-37)	新(1)ope
動, 静脈竇断症	4	1.0	3 4	3 6	
肺低形成症	4	1.0	3 4	3 5	
胎児胸水	4	1.0	3 2(29-33)	33(30-35) 胎(4)穿刺, 新(3)ドレナジ	
乳房胸, 乳房腹水 etc.	1	0.3	3 2	3 5	
胎児腹水	2 2	5.5	2 8(17-34)	3 1(20-38)	胎(15)穿刺
消化管閉鎖症	2 5	6.3	3 1(26-産後)	3 6(27-39)	
腹壁破裂	5	1.5	2 0(12-産後)	2 5(13-36)	
先天性食道閉鎖 etc.	7	1.8	2 9(25-35)	3 4(27-39)	新(2)ope
先天性十二指腸閉鎖 etc.	7	1.8	3 3(27-産後)	3 6(31-39)	新(6)ope
消化管回転症	2	0.5	3 0(30-産後)	3 4	
臍帯ヘルニア	1 1	2.8	2 9(21-38)	3 4(23-41)	新(7)ope
鎖肛	1 0	2.5	産後	3 5	
胎便性イレウス, 胎便性腹膜炎	3	0.8	3 4(33-34)	3 6(33-40)	新()ope
多脾症(種々の奇形を合併)	4	1.0	3 2(30-35)	3 4(34-35)	
Thanatophoric Dwarfism	1	0.3	3 6	3 8	
Potter Syndrome	8	2.0	2 4(15-32)	2 9(26-33)	胎(1)腹水穿刺
胎児水腫(NLHF)	8 3	21.0	2 8	3 0	胎(59) 別記記載(*)
水腎症	1 8	4.5	3 2(21-38)	36(23-42)胎(2)膀胱穿刺, 新(3)ope	
多発性腎嚢胞 etc.	4	1.0	2 9	3 8	
排泄管発生異常	1		3 7	3 8	
Prune Berry Syndrome	4	1.0	2 6(15-35)	3 1(21-36)	
胎児卵巣嚢腫	4	1.0	3 2	3 8	
血管腫	3	0.8	2 8	3 4	
先天性股関節脱臼	1	0.3		3 8	
短指症, 合指症 etc.	1 0	2.5		3 7	
小人症	2	0.2	2 2	2 4	
脊髄髄膜瘤 etc.	1 4	3.5	3 4(27-産後)	3 6(25-39)	新(6)ope

別表2. 胎児治療の内容

胎児治療を行ったもの 106例

そのうち胎児水腫に関するもの 83例 (78.3%)

その内容は

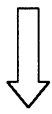
羊水除去, 穿刺	27	29W(22-36) (診断週数)
胸, 腹水穿刺	27	28W(20-36)
アルブミン注入	14	28W(23-36)
ジギタリス投与	12	25W(25-26)
胎児輸血	5	27W(23-30)
ラシックス投与	2	26W(25-26)

この(胎児治療を行ったもの)うち予後は

生	13例	13/59=22.0%
IUFD	19例	—
死	14例	
中絶	2例	78.0%
CP	1例	
分娩中の死	2例	—



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



4.まとめ

過去3年間,9機関でとりあつかった胎児異常の症例は397例であった。合併する奇形も多いため,疾患の種類とのべ数は,これをはるかに上回るのは当然である。

胎児奇形調査を主としたため,出生前診断のうち,CVS,羊水穿刺,胎児採血等の検査によるものは,そのほとんどが洩れており,主として,超音波診断可能な疾患の分布にとどまったのは,止むを得ないと考えられる。

逆に,無侵襲で行える超音波診断による異常の発見と治療という観点からすると,今後管理指針を検討していく上で,大きな手掛りを残したともいえよう。

今後,更に症例を各年毎に積み重ねるとともに,調査表をもとに,個々の疾患別管理指針を検討する予定である。